

竹山木管楽器製作所



自然の木を相手にした 100分の1mm単位の加工

「リコーダーは簡単に作れるように見えますが、自然の木を素材にしているので、そうたやすく加工はできません。手を抜くと使ってくださる方が失望されますしね」と竹山木管楽器製作所の竹山宏之代表。カエテ、ツゲ、ローズウッド、黒檀、桜等がリコーダーの材料だが、良い音を作るためには堅くて密度の高い、ふしのない木が必要だ。また、同じ木でも使う部分によって微妙に音色の差があるという。

一本のリコーダー製作に要する期間は2〜5年。50もの工程の中で、最も重要かつ時間を要するのは「乾燥」の工程だ。「暴れるだけ暴れさせるのです（木をこれ以上変型しないというまで乾燥させる）」との竹山代表の言葉が興味深い。

安定した音色が定評の「タケヤマリコーダー」は大阪が誇る世界ブランドであると同時に、日本における木製リコーダーの草分け的存在でもある。たいていの方が学校の音楽の時間で親しんだ楽器だが、歴史は古く、中世ヨーロッパ時代には存在していた。日本でも戦後、音楽教育のために用いられるようになったが、国産品はまだなかった。国内で作る必要に迫られた音楽メーカーが、当時、紡績機械に使うボビンを作っていた「竹山木管製作所」に白羽の矢を立てたというわけだ。今から40年前の話である。

「父は実物を手がかりに、日本古来の穴の空いた細長い木工製品を加工する『ろくろ』の技術を使ってリコーダーを作り始めました。ボビンを作るための刃物も自分で作っていましたので、リコーダー製作に欠かせないリーマや特殊バイトを開発し、自転車のブレーキを応用した穴開け機械も発明しました」。音を出すまでに時間がかかるほかの管楽器とは違い、吹けばすぐに音が出るリコーダーだからこそ、音を出す工程に高度な技術が必要となる。細くまっすぐ筒状に見える内径は100分の1mmずつ変化していて、それに合わせて削っていくかなければならない。第1号は2年がかりで完成した。

木の温もりと音色を 地域から世界へ

「リコーダーは昔の人たちが研究し尽くし、完成された楽器です。今のピッチに合わせて、300年も前の技法を踏襲して削っていくのです」。

眠る暇もなく生産に追われた時代から、クオリティを高めなければならぬ時代となった。製作者でもある竹山代表自らがヨーロッパの博物館に向き、オリジナル楽器を見せてもらうなどの努力を重ねた結果、18世紀のプレッサンが作ったリコーダーをモデルにした「プレッサンモデル」が生まれた。様々な材質のオリジナルモデルは60種類を数え、ブラジル黄楊に人工象牙装飾を施したテナーリコーダーを最新作として発表した。

「タケヤマリコーダー」はアフターケアも充実しており、竹山代表は最

良のコンディションで吹けるようにと日本各地をメンテナンスに訪れ、その出会いをさらなるビジネスにつなげる。また全国からの訪問者が増えたことがきっかけとなり、「アンリユワリコーダーギャラリー」を開設した。併設の「タケヤマホール」でレッスン教室や演奏会等のイベントを開催して地域の活性化を担い、マスコミをにぎわせている。

主な事業内容

木製リコーダー
の製造・販売
等



竹山宏之さん
代表

Company Profile

竹山木管楽器製作所

住 所 / 〒559-0003
大阪府大阪市住之江区安立3-8-12
創 業 / 昭和26年1月
従業員 / 7名（平成21年1月現在）
T E L / 06-6678-1000
F A X / 06-6671-0880



<http://www.takeyama-recorder.jp/>

「ろくろ」の技法を活かした リコーダー作り

